鍵の王国

ウィッテノス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鍵の王国

【Ｎコード】

Ｎ０１５５ＢＡ

【作者名】

ウィッテノス

【あらすじ】

ファンタジー小説に挑戦してみました。

1

暗い淵。
暗い、淵に沈んでいた。
嗚呼、ここは平穏と無音と無気力が充満している。
生ける、魂を圧殺せんとする圧力が渦巻いて、存在という殻を突き破ろうと無言の圧力が圧しかかった。

いつから此処にいるのか。

始めの記憶と終わりの瞬間が欠如している。嗚呼、そうだ、ここは永続の世界。
終わりが欠如しているが故に一度入れば抜け出せない。そう感覚で分かる。深遠の闇が海底のように遥か遥か果ての見えない果てまで佇んでいた。

絶望と苦悶の果てに見出した最後の境地。それが、生きながらに黄泉に「いる」ということだった。
恐らくはこの場に留まる限り意識はそう持つまい。
だけれど、ただひたすらーーーー心地よかった。

嗚呼、ここは遥か深い均越な均高の淵。

まるで漂い、浮かび、堕胎したように黒く濁った液に存在している。

この結末の果てにーーーーー生れ落ちるか否か、爛れ腐乱するかは如何様にも構ない。

ただ我をこの場に留め、この溶液ーーーー深遠に留めよ。

受難に負けた我を責める声はなく、恨苦に苛まれる事も無い。

定め。

果て落つるは我の定めか。それとも生まれ落つるのか。解らぬ。

嗚呼、嗚呼、未知なる意識が侵食する。

悟る。

この暗闇は、生ける人のいるべき場所ではないんだと。

抜け出さなければ。一刻も早く、この場を去らなければ待つのはただこの深遠と溶け合うという事態になるのを待つばかりだ。

しかしどうやってだ。

この闇は。

現世に出現したのでもなく、現世にあるのでもなく、ただ俺の内に巣食う闇なのに。

起きろ、起きろ！　起きて逃げるんだ。闇は肉体の先にある俺の本質に宿っている。

だから、起きるんだ。

現実に戻れば消える闇だ。起きろ！！！！！！！

そして、起きた。
直前までの夢の記憶が極めて鮮明に思い出せる薄い薄い眠り。
闇の中を漂う夢。

ああ、いつまでーーーーーーこんな夢が続くのか。

部屋は真っ暗い。
カーテンを開ければ外はもう眩しい筈だ。だって、時計はもう朝の七時半で、今日の天気は晴れのはずだから。
今日の天気すらすぐに思い出せるほどの目の冴えようだから、当然眠った気はあまりしなかった。

とにかく起き出す必要があった。
もう近隣の人々は起き出して、朝の活動を、各々の役割を始めているのだろうから。

そうして、宿舎を出ると、暑い日差しが目を焼いた。

ーーーーああ、暑い。

例年にない酷暑の日差しは空間を歪めて、周りに漕然と並ぶ似たような宿舎を、すぐ近くにあるはずなのに歪め、そのシルエットを分かりづらくしていた。
宿舎の目の前の道路は延々と坂になっていて、協会までの道のりを

鬱屈とした気持ちで眺めた。

しかし時間的にもうそろそろ遅刻になってもおかしくない時間帯だから、すぐに早足で歩き出した。
修士の身分で遅れたら、いつ首を切られてもおかしくない。だから、平静を装いながらも気持ちは結構焦っていた。

坂を登り切ると傾斜はなだらかになっていき、雑貨店や飲食店が並ぶ結構開いた土地になる。
この坂道から帝都に直通する国道までいけば、そこにはもう協会の建物がある。

そこから更に帝都の方向に少し進めば棟怜順天軍の屯所があり、自然と協会のある国道付近はそこの武家の人たちがよく通るのを目にしていた。

ところで、国道に近づき、協会の建物が見えた付近で、武家の一団と一般の人たちが集まっているのが見えた。
武家の一団が何やら通行人に話しかけている。たかりか、揉め事か、あまり良いイメージは沸かなかったが、ビラを配っている様子から何かの宣伝だと分かった。
武士たちの声が距離的に近づくにつれて鮮明になっていく。

「……先年の王太子殿下拉致事件の首謀者、クワトー・アミンの情報の提供に協力して欲しい。
また同時に、アミンの所属母体である熱心党とそれに所属する犯罪者達の情報の提供にも協力をお願いしたい。
どんな些事でも構わん。市民の諸君、これは内務局からの通達である。広く協力を求める」

そんなことを言いながら、厳しい顔つきで粗野な素振りで武人から俺にもビラを差し出された。
刀剣を下げていたので緊張しながら受け取ると、ビラにはびっしりと昨年の王太子拉致事件の詳細と熱心党の情報、特徴が書かれていた。

会釈をして通り過ぎると、相手は感心なさげに他の市民に眼をやる。
王太子殿下の拉致事件くらいは知っているが、普段新聞など読まない俺はこの手の情報に疎かった。
久しぶりにニュースの知識を頭に入れて時事を知るため、協会までの道のりを、それに目を通しながら歩いた。

一時限目の教科は歴史だった。
学舎に入るとみな一様に席についており、教導書や書物を読んで過ごしていた。
学舎では私語は厳禁であるから、協会での学期更新間近いこの時期は特に会話を楽しむ余裕を持った生徒は尚更少なかった。
俺も席に座り、歴史の教導書を開いて、読むでもなく目を通して、授業までの暇な時間が通り過ぎるのを待つ。
息が詰まるようなこの学舎も、あと一期で卒業だと思えばもう少しぐらいなら我慢しようという気になる。
だから、とにかく目をつけられないように、何事も無く、と思うのは俺も大多数の生徒も同じなのだろうと思った。

「おい」そんなことを思っていると後ろの席から声をかけられた。
友達のグアルが他の修士のものであるはずの席に座りながら、こっ

ちを見ていた。

「探したよ。ルテニア導師がお呼びだ。俺も呼ばれてるんだ、一緒に行こう」

「何の用事で？」俺は怪訝な顔を隠さなかった。

この時期に導師に呼び出されるなんて嫌な予感しかしない。

「俺らに特別教科があるんだってさ。詳しくは知らないけど、悪い話でもなさそうなんだ」勇気付けるようにグアルは微笑むと、行こう、と言って席を立った。

なんだか分からないが、この時期に面倒な事態にだけはならないでくれ、と祈るばかりだった。

ルテニア導師の個室は隣の協会本部の三階にあった。導師は俺たち修士たちに魔術、教養、道義を教えてくれる学校の先生みたいな役割だが、その地位と権威はまったく違った。

導師は協会から魔術師に選ばれた者達の中で、国家の推薦によって学舎の導師として修士たちを教える立場の人間で、国家全体で数万人しかいない魔術師たちの中でもエリートの部類に入る。

魔術師の存在は国家元首の保安、権力の補佐といった観点からその地位は高貴であり、いかなる場合でも警察や軍、または役人にも拘束する権利は無く、常にその私的な意思は守られる。

王侯貴族、軍隊内部、魔術師の士官先は実に幅広く、その結束も強固だ。

その魔術師たちの作った同業者組合が「協会」であり、俺はそこで学ぶ、学生のようなものだった。

だから、導師は敬意を持たれ、かつ怖れられる。
なぜならここに通う修士の大半の悲願は魔術師になることであり、導師はその絶対的な権威で我々の運命を実に簡単に容易く決定することができた。

「グアルです。イシュテアを連れてきました」とグアルが幾分引き締まった顔で個室をノックする。
中から「入れ」という声が聞こえると、二人で若干躊躇いながら部屋のドアを開けた。

部屋は二十平米程の広さの、簡素な内装の部屋。
入ったことは2回ほどしかないが、以前入った時から受ける印象と変わらず、飾り気のない部屋だった。
奥の窓に面したデスクには導師が座っており、その周りにまた二名の、一目見ただけで高貴な位と分かる華美な服装を着た男たちが座っていた。

グアルが息を飲み、直立不動になって背筋を伸ばす。
その様子にただならない気配がして、俺も緊張し始めた頃に、ルテニア導師がぽつりと言った。

「ご苦労、グアル君。誰にも悟られなかっただろうね」「はい、細心の注意を払ってきました。誰も不審には思っていないでしょう」

グアルは即答する。
導師は苦笑いのような笑顔を浮かべた。
他の二人の男はくすりとも笑わず、こちらを品定めするように時折こちらを見ていた。

そして突然片方の男が話し出す。

「彼らが君の言う秀才か。私は連合協会のアサカだ。隣にいらっしゃるのが主事のアルタナさんだ。
君らの事は聞いている。楽にしていい」

連合協会！
魔術師たちで作る協会の、更にその集まりで、いわばこの国の協会の総本山みたいなものだ。
そこに所属する魔術師達も国家が誇る秀才揃いで、この国の魔術団体を総括するエリート中のエリートだ。
その方々が、なぜこのような場で俺らに用があるのか、到底理解しかねた。

「君たち二人は、知っているかね。隣国四川が東蛮夷の侵略を受けた事に端を発した内戦を。
四川は二つの勢力に分裂し、それぞれ東蛮夷と戦線を広げている。
その内の一つ、我々が懇意にしている部族新邦に要人を送り届けて欲しい。
君たちは我々協会からの特使であると向こうに伝えておく。口外はしないように。絶対にだ」

耳を疑った。
隣の国で戦争が起きているのは知っている。
だがそれを協会の修士に過ぎない自分が、なぜ特使として派遣されねばいけないのかまったく分からなかった。

「こちらのお二人は僕の先輩なんだが、いま話された事情によって僕のところに協力を求めてきたんだ。
君たちには唐突だろうけど、協会から魔術師を派遣できない事情が

ある。修士の中から、それならばということで君たちを選んだ」
ルテニア導師はそう言うと席を立って、険しい顔でこちらを睨むように眺め見た。
そして髭を撫でながら俯き、ため息のような深い息を吐く。
「推薦の理由は、グアル君はこの学園の学生を代表できる存在であること、イシュテア君は……先方の要人の条件に合致した人物であるからだ。
君たちは特使としてこちらが伝える指示に従い、行動して欲しい。
……君たちは、この場で我々三人の権限により魔術師たる資格足りえる存在であると認識する。
が、任務中は修士として外部にも内部にもその事実は伏せて置くように」そう言って、後ろの窓の外へと振り返った。
「私を……魔術師に？」先に呟いたのはグアルだった。
俺自身も驚きを隠せず、気持ちの高ぶりと緊張を隠せずに足が少し震えだしていた。
嬉しいに決まっている。だが、それほどの代価に求められる任務は、一体どんな意味を持っているのだろうという恐怖心もまたあった。
「そうだ。単位と試験を特例により免除する。この国のみならず、君らは世界中で自身を魔術師であると称することができるだろう。
その証明は連合協会が保障する。分かるな？　これは特例だ」
そういうと再びルテニア導師は振り向き、鋭利な視線で睨みつける。
そこにアサカさんが補足するように言う。

「事の重大さは認識できたはずだ。他言や悟られる様なことがあれば同時にそれ相応の厳罰のリスクがあることを忘れるな。
君たちは八月六日にガザにあるグラムトンホテルに行き、そこで待機して指示を待て。
予約はこちらで取ってある。指示の伝達は協会の人間が直接行う。
異存は無いな？」

「はい、ございません」二人で頷くと、ルテニア導師は険しい顔を窓側に向けた。

そして呟く。

「君らは、このような報酬がなくてもいずれ魔術師になっていたであろう秀才だ。
だから僕は対等なつもりで君らには常に接してきた。今回の依頼もそうだ。
君らは信頼している。協会の人間して誇りを持って仕事をしてくれ」

「はい」と二人で答えると、導師の顔はいつもの柔和な顔に戻って微笑んでいた。

「魔術師として、全てを投げ打って事に当たれるほど意義のある任務はそうはない。
権威や、威厳や、財産。守るものが沢山あるからね。だから君らが少し羨ましいよ」

そう言って微笑む導師の顔は、裏表の無い真実の表情だった。

二

ガザは協会のあるウラデ地区から徒歩ならば四日ほどの道程がかかる場所にある。
それほどの旅路にはそれ相応の資金と荷物の準備が要るのだけど、鉄道の手配をしてくれているらしく、グアルとは翌日に駅舎で待ち合わせをしておいた。
たぶん当分帰れないのだろう、と勝手に算段をつけていたので、その日は部屋の片付けと荷物の準備に費やし、疲れてほとほと眠り込んでしまった。

翌朝、目覚めた時、朝の六時半を指していた。
すぐに起き出して、宿舎の外へ寝巻きのまま出て井戸で顔を洗う。
朝の空気が、程よい温度で頬を撫でた。
外はもう明るい。出勤する仕事人や学生の姿がちらほらと散見される。
天気も晴れている。自然と気分が清々しくなるような、朝の空気だった。

一瞬、立ち眩み。
井戸の端に手をかける。何か一瞬血が薄まった様な感覚がした。心臓が心なしか弱弱と空打つように鳴っていて、胸をつかんだ。
ふと脳裏に、今日見ていた夢の残照が残っていて、他の記憶から押

し出されるように目に浮かんだ。
今日は、あの闇の夢は見ていない。
過去の自分と関連がある夢を見ていた。

一面の青空。草原の土手の茂みを走り回る夢。
サーカスの一団が、家族を連れた人々を出迎え、青空の下で様々な催しをしてくれている。
俺は一人で走り回っている。
大きな色とりどりの玉が、そこら中に転がっていて、それを追いかけている。
いつまでもいつまでも。

また井戸の水に顔をかけた。
何度か夢に見る光景。一体、俺は、誰に連れられて、あの場所にいたのだろう。
誰が、俺をあの場所にいざなったのだろうか。

変な感傷じみた考えをしている、と自分で気づいてやめた。
徐々に血潮がせり上がってきて、心臓の鼓動に力が戻っていく感覚がした。
少し休んだのが良かったようだ。

早く行こう。
汽車は十二時だけど、早めに行ってぶらついてたって良いんだから。
そう思って、宿舎へ戻ることにした。

駅についたのは十時半ごろだった。

相当ゆっくりとぶらぶら寄り道して歩いたのだが、それでも待ち合わせまでには一時間以上も時間があった。
ふと、昨日の導師の言葉を思い出し、自分がもう魔術師になっているんだと思い出した。
自覚は無い。でもめちゃめちゃ嬉しくて、街中であるにも関わらずにやけそうになった。
それはそうだろう。
医者、役人、軍の士官。
王侯貴族とまではいかないまでもそれとすら関係の深い、言ってみれば憧れの職業だ。子供の頃からの夢といっても言い。
そのために今まで努力していたのだから、嬉しくないわけは無い。

だけど自分が導師が言うほど成績優秀だったとは思えない。せいぜい中流グループにいたはずだ。
グアルみたいな逸材は特例としても、成績上位者はそれこそ元は名家の出で英才教育を受けて、その中でも更に才気旺盛なやつらばかりだった。
そりゃもう一目見れば輝いているのがわかるぐらい。
グアルはまったく凡人にしか見えない呈で、魔術に関しては天才的な才能を見せる。
そこが面白かった。だから話しかけて友達になった。興味がわいたんだ、奴の内面に。

あいつが選ばれるのは分かるが、なんで俺が、というのが正直な感想だった。

卑下したことで気持ちが冷めてしまって、駅舎の待ち合わせの場所まで急ぐことにした。

改札で駅員に昨日渡された通行許可証を見せると「ご苦労様です」と言われて通してもらえた。
鉄道など実に久しぶりだ。軍用、産業物資運搬用にしかほとんど使われないものだから、旅客で鉄道を使えるのは上流の階級の人間ばかりだ。
むかし乗った時はまだ裕福だった頃で、それでも何度も頻繁に乗れるようなものではなかった。
本当に自分は魔術師になったんだなぁと、ここで再び嬉しさが蘇ってくる。
改札を抜けて駅のホームへと続く階段を抜けると、大型の、それはもう巨大な鉄の塊が停泊していた。
魔力の力で動くだけの、鉄の塊。
鉄の加工技術が貧弱な我が国では複雑な形状の車両は作れないが、それでも以前乗った時には内装だけは豪華な作りで、煌びやかな装飾を施した乗り物だったと記憶している。
昔より形は幾分か変わっていて、多分進行のスピードを上げるためだろうか、機能的なフォルムに変わっていた。
先端がなだらかな曲線で、巨大な車体が芋虫のように横たわっていた。
まるでビル一つ寝かせたような巨大な鉄の塊は、まるで息をするように上下にゆれていた。

ホームの途中途中には屋根の付いた小屋のような駅舎があり、それぞれに番号が割り振られていた。
俺とグアルは八番駅舎で待ち合わせている。だから数字を順に追っていって、八番の駅舎の扉を開けた。
中にはタバコを吸っている会社員風の男と、グアルが座っている。

二人ともこちらへ目をやる。
グアルが「よう」と声をかけた。ずいぶん早い。まだ出発までは一時間以上もあるのに。
……やはり、内容が内容だから遅れないように早めに来たのだろう、こいつも。
「お前も早いな。どうする？　出発までまだ大分あるよ？」と俺が腰掛けながら話しかけると、グアルは苦笑いする。
「いや、しょうがないよ。魔術師になったばかりでの仕事だし。そりゃ万全期すだろ。
昨日は悪いね、不意打ち的にあそこに呼んでしまって。周りに聴かれないようにとの、導師の配慮で」
タバコを吸っているおじさんがちらりとこちらを見て、また灰皿に視線を戻した。やはり珍しいらしい。この職業の人間は。
「良いよ、気にしてないから。
それより仕事の事で知っておきたいことがあるんだけど……」するとグアルは話を遮った。
「いや、それは後からにしよう。後で話すよ。俺も詳しくはしらないけどね」
そう言われてああ、そうか、無用心だったな、と自分で恥ずかしくなった。こいつのほうがよっぽど自覚してる。
仮にも外でどんな耳があるか分からないんだから、喋る様な事じゃないと気づいた。

「それより、鉄道なんて俺は初めてだよ。お前乗ったことある？
俺なんて駅員さんに聞いてここまで来たからね」

とグアルは笑いかける。

「俺は二回ぐらいあるけど、殆ど覚えてないぐらい昔だよ。
君、平民の家系だからねぇ」と冗談めかして言うと「あ、酷いなぁ」
と向こうも冗談だろうが、怒ったような顔をして、その後で笑う。

……こいつは、苦労してる分めちゃくちゃ良い奴だ。

通常協会から選出される修士は魔術的な才能のある名家の出が大半
だが、玉に民間の学園で才能を見出され、選出される修士がいる。
俺もその中の一人なのだけど、俺は元々名家の出身で、その後に平
民になったから、本質的には魔術的な名家の血を引いている。
だから、こいつのように完全な平民の出で修士になる人物は珍しい。

「やっぱ鼻にかけてるんだろ？　自分がイシュテアの人間だって。
光る原石だと思ってるんだろ？」向こうが悪戯じみた口調で言う。

「いやいや、冗談だから。イシュテア家って言っても分家の上に潰
れたから。まぁ光る原石だとは思ってるけど」といって俺も笑った。

「やっぱそう思ってるんだ。良いねぇ生まれながらにサラブレット
な人は。俺なんて本当に馬小屋で生まれたからね。
生まれた時子馬と目が合ったからね」こいつが自慢のように何度も
繰り返す自慢じゃない話。

馬小屋で生まれたという話を自分の身分をあざ笑う様に冗談めかして言う。

そうそう、平民でも馬小屋で出産なんて状況ないと思うから、嘘かほんとか俺には分からない。

「いやいや、それも冗談だって。良いじゃん、馬小屋だって。啓示者だって馬小屋で生まれたって伝承があるよ。お前大物になるって」

「絶対思ってないだろ」「いや……お前成績良いから。割と真剣に思ってるよ」「ほんとかよ」とグアルは笑うと、まんざらでもなさそうに背もたれにもたれかかった。

他愛もない会話だが、こいつとの会話はいつも楽しい。波長が合うっていうのかな、こいつがほんとに大物になったら、その時も変わらずに友達でいたいと、またいつものようにそう思った。

3

汽車。
汽車に乗っている。
隣ではグアルが眠りこけており、先ほどの緊張した素振りがすっかり消えているのはさすが大物だと思った。
仕方なく、窓の外を見る。
分厚い鉄の重厚さに合わせた窓は、それ自体も分厚く、窓の外までの光景を遠くに見せて、まるで密室に閉じ込められたように息苦しくなるような感覚を覚えた。

だから席から立ち上がって、開放車両に移ることにした。
グアルの足を強引にどけて席を立ったとき、黒塗りの車両が窓の外に見えた。この鉄道を護送する駆逐車だ。
鉄道の周辺には駆逐車と呼ばれる車両が一つの鉄道車両に４車から８車両護送についており、襲撃も下手な規模で手を出せば返り討ちに合うということを以前聞いたことがある。
この鉄道自体もパルチザン活動家やゲリラから産業物資や軍需品を守るために極度に硬化されている。
そうしなければならないほど、この帝国は人から恨まれることをしていると言うことだ。
……滅多な事は言えないが、やはりこの国も大国レースに勝ち残るために他者を犠牲にしてきた歴史があるということだろう。
俺も子供の頃の教育でそういった歴史を教えられたが、良い気分には、ならなかった。

みな自国の華々しい戦果や、勝ち組であることを聞くと、学校の子供ですらそのことを誇るが、それが、いつ自分たちが転落するかもしれない状況にあること、
そして今の地位を築くために犠牲にした人々の恨みを買っていることを思えば、転落した時の苦痛はまたそれ以上だろうと思った。

だから、俺は恐ろしかった。
いつか負けた時、虐げられてきた彼らと同じところまで落ちたとき。
苦難という地獄で育った怪物に、我々は滅ぼされるということに。

開放車両の扉を開ける。

不思議なことに誰もいなかった。

まだ、ガザに着くまでには相当な時間がかかる。
俺は窓をのぞむソファに腰掛けて、持参した魔道書に目を通して時間を過ごす事にした。

「ガザに到着いたしました。御降りの紳士、淑女の皆様方はどうぞお気をつけて御降り下さいませ」
なかなか起きようとしないグアルを起こして汽車を出た時にはそんな丁寧なアナウンスが流れていた。
二人でまばらな客達をかいくぐって階段を降り、改札を出ると、緊

張を解いて深い息を吐いた。
それも当然で駅には私服の軍人や警察がいたるところにいると以前聞かされていて、まさか目はつけられないだろうが緊張ぐらいはするような状況ではあった。

「で、グラムトンホテルはどこだったかな。俺は地図に疎いので、お前に任すよ」グアルがそんな無責任なことを言うと、地図を手渡してきた。

事の準備に必要な道具や情報はグアルに渡されている。
そのことからも、俺はグアルほど信頼はされてないらしいということが分かる。

劣等感じみたものを感じながらも、俺は渡された地図を見て、目的地までの道順を考える。

「いや、駅のすぐ近くみたいだよ。ここから駅を出て、駅の二階に行くらしい。で、それをあっちの百貨店の方向に行けば、その辺にあるみたいだ」

二人で頷くと、発展し整備されたガザの町並みに感心しながら、目の前の駅の二階へと続く階段を上った。

「……お前には、話しておく」と唐突にグアルが言う。

続きを促すように俺はグアルを見た。すると彼は耳打ちするように顔を近づけて小声で囁く。

「警察、軍、国家にまつわる役職に付く全ての人間に対して、今回

の仕事は厳重に口外してはならない、と言われた。
これの意味するところが分かるか？　つまり他国への干渉を性質としている今回の仕事は、協会の独断だ」

「それは、どういう意味だ」とすぐに聞き返すと、グアルは押し黙った。が、やがて話し出す。何か、口の重い話を語るような素振りだった。

「よくはわからん。よくはわからんが、四川は今は内戦中だ。三つの勢力が互いにいがみ合っている中一方の勢力だけに協会が肩入れするというのは当然他の勢力を刺激する。
そして当然、協会は我が国の権力の中枢にある、政府を諮問する団体の一つだ。この行動は国家の意思で無ければならないはずなんだ。しかし、導師は国の関係者、警察、軍には特に内密にするようにと言っていた。
これが協会の独断だとすれば……もうその時点で重大な憲法違反だ」

俺は驚いて、恐らくは希望的観測を口にした。

「まさか！　そうだとは限らないだろう。国家の関係者への口外を禁じているのは単に末端の役人や軍人にばれたら面倒な事態になるからとか、そういう理由もあるんじゃないか？
仕事の正確な内容を知らない俺には、詳細はわからないけど、少なくとも聞いた範囲では決め付けは出来ないぞ。
そもそも協会が独断をして罪を犯すのも考えにくいし」

グアルは遮るように言い返す。

「もちろんだ。だが俺はお前を仲間だと思ってるから、全部喋るつ

もりだ。お前の意見も聞きたいからな。
そういう可能性も、あるという話だ」

沈黙が訪れる。気まずさとか、感情的な間ではなくて、純粋に考える時間が必要なための間だった。

俺が先に考えを口に出した。

「そういう可能性があった場合、俺たちに求められるのはなんだろうな」グアルは首を振る。

「わからないけど、少なくとも導師の言うように口外しない、という徹底が必要だな。もしかしたらいまこうして喋ってるのもやばいかもしれない。
この話はここまでにしよう。俺らに、できることなんて今は従ってることくらいしかないんだから」

重い雰囲気。
先の見えない不安が横たわるのに、外は晴れ晴れとして、なんともアンバランスで気持ちとの調和が取れない、嫌な景色だった。

グラムトンホテルへはすぐについた。
チェックインを済ますとホテリアーから鍵を渡され、５０２号室へと向かうように言われた。
さっさと部屋に入ろうとする俺たちにフロントのホテリアーが「お連れの方も、もうご到着されております」とにこやかに言うのを、

俺とグアルは顔を見合わせて、同時に緊張が人相に現れた。
階段を上りながら、グアルが話しかける。
「誰だ、待っているやつってのは。協会の人間か？」
「分からない。先方の要人という可能性もあるぞ」俺自身疑問と、そして強い不安を感じていた。グアルもそうなのだろう。
やがて階段を上りきって、すぐ隣が５０２号室だった。
「先にノックをしよう」そうグアルが言うと俺の前に立ち、コンコン、と少し強めにノックした。
少し間が空いたあと、突然扉が開く。
扉の間から、やたらと目つきの鋭い、酷薄な感じを覚える瞳をした女性が俺と、グアル。順に見据えると、「協会の人間？」と小声で囁いた。
「そうです」「そうだ」俺とグアルはほぼ同時に答える。
すると相手はふいと顔を逸らし、扉を大きく開け放って「入って」と呟いた。
グアルが怖気も無く中に入っていくので俺も従い、廊下を抜けて客間の中へと入っていく。
すると視界が開けて外にはガザを展望できる一面硝子張りの室内と、キングサイズはあろうと思われるベッドが三つも備え付けてある豪華な客間があった。

一体何平米だよと驚くほど広い客間には、蒼然と高そうな家具が並んでいた。
そして軍艦を油絵で描いた大きな絵画を背にしたソファの上に、若い女性が座っていた。
すらりと伸びた足を組んで、整った顔でこちらを何か怪訝に見ている。後ろからさっきの目の鋭い女性が来て、
「協会の人間です」と、俺たちに対してとは違う、抑えの効いた、優しくトーンを落とした声で彼女に言った。

彼女は眉間の皺を緩めて、こちらを見ながらに言う。

「そうでしたか。これからご厄介になります、アズチと申します。協会からの特使の方が護衛をしてくださると言うことで、非常に心強く感謝の気持ちに堪えません。
貴方方は、協会の方からは何と？」

グアルが困惑したように言う。

「我々は、貴方方を隣国の同胞部族新邦に送り届けるように仰せつかっています。
まず、ホテルについたら協会の人間からの指示を待てと言われてましたので、いきなり貴方方がいらっしゃったので驚いているような状態です」

「そうでしたか、それならば貴方方が次の指示を受けるまで出発は延期ですね。
どうぞ、私たちには遠慮せずにお寛ぎになってください。
必要ならばルームサービスで好きなお食事を取っていただいても構いません」

そう言うと彼女はテーブルに置いた雑誌を手に取り、コーヒーを啜った。先ほどの目の鋭い女性も彼女の隣に座った。
俺とグアルはお互いに見合うが、どうして良いか分からないような状態だった。

取りあえず俺がアズチさんの対面のソファに座ると、グアルも俺の隣に座った。
そして俺は「お腹空いたね」と呟いた。

二人の女性がくすりと笑って俺のほうを見る。

「ルームサービスは、自由ですよ？」アズチさんがそう呟いて、また雑誌に目をやった。

「マジか、お前……」グアルが飽きれたように俺に言う。

「良いじゃないか奢ってくれるって言うんだから。痛いところにつらい反応するなよ」

「俺は外で買ってくるよ……」グアルがそう言うと「ああ、俺もそうするやっぱり……」と財布を思い出して憂鬱になった頃。

「お金の事は構いませんから、遠慮なさらないでください。協会の特使の方々に関して、その費用はこちらで負担すると言ってあります。お気になさらずに」

「じゃあハンバーグを食べたいな俺は。お前どうする？　フライドチキンとかさ」と俺が少々躊躇う時間を省略して言うとグアルは俺を諭すように言った。

「そういうわけにいかないだろ。協会の大事な客人だぞこの方々は。少しは遠慮しろ。俺は外で買ってくるから」冷たく言い放つ。

「分かった、俺もちょっとおかしかったよ。俺も行くから一緒に行こう」

するとアズチさんが言う。

「本当に遠慮しなくて良いんですよ？　これからこちらが旅費や食費宿泊費を負担するわけですから、それも報酬の一部と考えていただければ」

「じゃあハンバーグにするかな。お前は？」めげない。だって本当にお金が酷い状態になって恐らく幼稚園生でも数えられる範囲内のお金しかなくて旅の間ずっとそれが心配で朝ごはんだって食べてないんだから昨日の夕飯でお金ないから。

「もう好きにしていいよ……」そう言ってコートを取って出かけようとするグアルに「お前これ見てみろよ」と俺は半ば怒って財布を押し付けた。

「なに、これ」「財布だよ。特待生と普通の修士の差がこれだよ」グアルは財布をの中身を見て驚いたような顔をした後すぐに閉まった。

「分かった悪かったよ。あんまり見せびらかさないほうがいいぞこれ」「俺が今日の朝食抜いた真相があったはずだぞ、あ？」「わかったわかった」グアルは苦笑いすると部屋を出て行った。

「ルームサービスって幾らまで良いんですか？」さすがに苦笑いし

たような二人の笑顔が痛々しかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0155ba/

鍵の王国

2012年1月6日00時47分発行